

# 中学校 国語科 部会

部会長名 福智町立赤池中学校 校長 村上 きぬよ

実践者名 香春町立勾金中学校 教諭 前田 朋子

## 1 研究主題

「生きる力」を育む学習指導の研究  
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～

## 2 主題設定の理由

### (1) 社会の要請と新学習指導要領の動向から

知識基盤社会と言われる現代であるが、近年顕著となっている問題は、知識・技能・技術をめぐる変化の速さが加速度的となり、昨今言われている、情報化やグローバル化という社会の変化の予測を大きく越えようとしていることである。

このような、情報過多とも言える社会を生きることとなる子ども達は、その変化を受け身で対処するのではなく、主体的に向き合い、理解し、その過程を通して、自らの可能性に気づき、それを発揮し、豊かな人生を創造していくことが望ましい生き方と考えられる。

このような状況を踏まえ、新学習指導要領では、従来の指導による「何を学ぶか」に加えて「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」が、答申で提起された「子ども達に育成すべき三本の柱」として求められている。目標や内容も再整理され、内容・資質・能力についての明確化と共に、子どもの、主体的・対話的で深い学びを実現するための配慮事項が示されている。

以上のことから、新学習指導要領の全面実施を見据え、本主題を掲げた実践研究を行うことは、本郡学校教育の充実を図る上で、大変意義深いと考える。

### (2) 田川郡の生徒を取り巻く状況から

エネルギー革命に伴う炭鉱の閉山は、長年にわたり、生徒の学習環境を含めた生活の根底に影響を与え続けていると言われている。本郡の生徒の状況も、経済的に、またそれに付随し生活環境的に厳しい環境に置かれている生徒が依然多い。しかし、それとは反対に、携帯電話の所持率や、テレビ・ゲーム等、情報通信機器と関わる時間は多く、これらが、生徒の生活習慣や家庭学習に影響を及ぼし、学力の向上を阻んでいる一因とされる。

その学力向上のために、生徒の思考力・判断力・表現力を図るための様々な試みがなされているが、特に思考力・判断力・表現力を問う国語B問題の平均正答率は、全国平均や福岡県平均との差が大きい状況が続いている。

これらの力を培うこととして、グループでの交流学习や、自分の考えを発表する場などの機会は設定されるが、活動そのものが目的になっている場合が少なからず見られ、生徒に確かな学力をつけることに必ずしもつながっていないと考える。

本研究においては、活動そのものを目的とするのではなく、活動の中で「何を学び」「何ができるようになるか」を実感させていくことで「主体的・対話的な深い学び」を実現することができ、「生きる力」を育てることにつながると考えた。

### 3 主題・副主題の意味

#### (1) 「生きる力」を育む学習指導とは

「生きる力」を育む指導とは、各教科、特別の教科道徳、総合的な学習の時間及び特別活動において、子どもの発達段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げる3点の資質・能力を限りなく育成できるような授業作りを行うことである。

- ① 生きて働く知識・技能の習得をさせること
- ② 思考力・判断力・表現力等を育成すること
- ③ 学びに向かう力・人間性を涵養すること

#### (2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善とは

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善とは、この三つの学びの視点から、学習過程の質的改善を行うことであり、そのことを通して、「生きて働く知識」「思考力・判断力・表現力等を育成すること」「学びに向かう力・人間性を涵養すること」を育成するものである。

### 4 研究の目標

他者の作った俳句で使われた言葉を、理解・分析・解釈し、その句にふさわしい下の句を作成する活動を通して、第一学年「読むこと」における文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考える学習指導のあり方を究明する。

### 5 研究の仮説

第一学年「読むこと」において次のような手立てを取れば、「読むこと」における根拠を明確にして考える力を育てることができるであろう。

#### (1) 単元を貫く言語活動の工夫

本単元では、他者の作った俳句で使われた言葉を、理解・分析・解釈し、その句にふさわしい下の句を作成することができるようにする。

そのために、前単元を横断的に使用し、詩や文章の言葉に、作り手がどのような思いを乗せ作ったのかということ、その中の言葉に焦点を当て、理解・分析・解釈し感想を持つという、単元を貫く言語活動を設定する。それに向かって、着きたい力が毎時間の学習の中で積み上がっていくようにする。

#### (2) 選択した事柄の自己の観点を交流し、客観的に検討することで適切な観点を導き出す工夫

自分なりに考え作った下の句を、全体及び班で交流する活動を通して、客観



			を感想に書かせ発表し共有する。	・女川一中生の俳句に下の句を付けるという単元を貫く活動を設定し、作ってみようという意欲を持たせるようにする。
3	1	自分がよい俳句だと感じたものを選ぼう。	①前次で書かれた生徒の感想を確認し、教科書本文を音読する。 ②本単元の作者が出版した女川一中生の俳句集をと教科書に掲載されている一中生の俳句から、心を動かされた俳句を一句選びその理由を記入する。	・自分が選んだ俳句の中の、どの言葉に、どのように心を動かされたのか、とすることを ①共感 ②驚き ③疑問の三観点で選ばせる。
4	1	気持ちによりその下の句を作り発表しよう。	①教師の構想シートを見ながら、自作の俳句を作り、それを発表する ②全員の下の句を見て感想を持ち、それらをもとに、班でよりよい下の句を練り直すためにふさわしい俳句を選び取る。	・ 本次で、上の句にふさわしい下の句を一句完成することができるようにするために、前次で、それぞれが選んだ俳句を班で持ち寄り発表する場を設定する。さらに班員の考えを聞き、最終的にどの上の句に「人の心を動かす言葉」を用い、それにふさわしい下の句をつけることができるか、考えながら上の句を決定させる。
5	1	「言葉」の持つ力を理解しよう。	女川一中生の、俳句に込められた思いを読み取り、その俳句にふさわしい下の	・他者の読みの視点を参考にした作品へと再構築させる。 ・上の句から、心を動かされた言葉や、決め手となった言葉

		句を作ることで、言葉には人の心を動かす力があり、人々の心と心、人と人をつなぐ力を持った言葉であることを理解する。	を考えさせる。 ・自分の考えや意見を的確に述べ、他者の考えを聞き、再構築ができるようにする。
--	--	--	---

## 7 指導の実際

### (1) 本時の指導観

前時までに生徒は、それぞれ班で「女川一中生のどの俳句に下の句をつけるか」について、下の句を考えたいものを選び、その視点を交流している。本時ではさらに、班員それぞれが、本時で、自分自身がどのような思いで、どのような下の句を作りたいのかという考えを伝え合う時間を設定し、一中生の俳句

にふさわしい俳句を作るという目的に向かい、考えを共有させた。その際に「意見交流をするときは」という考えるポイントを提示し、(【写真1】) 授業の流れや交流のポイントを確認してから意見交流を行った。(【写真2】)

交流を行った後、「女川一中生の俳句に込めた思いを感じ取り、その俳句にふさわしい下の句を完成させよう。」というめあてに沿って、女川一中生の五・七・五の俳句に続けて、



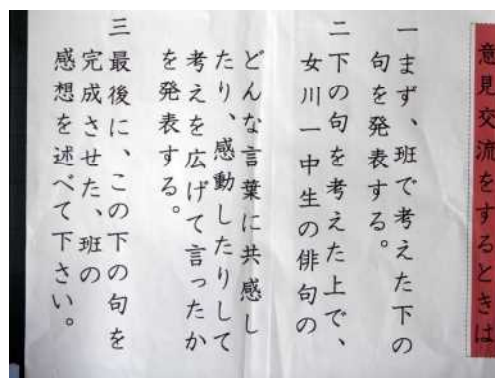
【写真3】

七・七の下の句を班で考えて付け足す活動をする。(【写真3】)

その際、作成活動の一助となるよう、前時までに使用していた「構想シート」を掲示し、どのように上の句の言葉を解釈、分析し、上の句を作った生徒の心情を推し量りながら進めればよいのかをフィードバックさせながら作成を進めるようにした。また生徒個々人にも、構想シートを再配付する。構想シートを活用し、さらに言葉を分析解釈し、より良い言葉を紡ぎ出して、まとめていけるよう指導する。(【写真4】)



【写真4】



【写真1】



【写真2】

班活動の後、各班が作成したものを発表し、それぞれが作った下の句を、「どのような言葉を選び、解釈し作成していったかを知る機会とする。その後、発表の内容を見聞しながら、自分の感想を記入する時間を設定し、前述の各班の下の句とその考えを聞いた上で、「言葉の持つ力とはどのような力なのかということを考え、単元のまとめとする。」(【写真5】)



【写真5】

(2) 本時の主眼

女川一中の生徒の作った俳句を読み込み、その情景を思い浮かべ、その心情を自分なりに理解し、女川一中生の思いに寄り添う下の句を作ることを通して、お互いの考え、出し合った言葉に触れ、自分たちで完成させた句から、人の心を動かす言葉の持つ力を感じ取ることができるようにする。

(3) 展開

	学習活動・内容	発問・指示	○指導上の留意点○評価規準	
導 入	1 前時までの学習を振り返る。 ○前時にそれぞれ班で選んだ俳句を掲示して紹介する。 ○前時で選んだ女川一中生の俳句に、どのような下の句をつけたいか、自分の考えを発表する。	●スムーズに話し合い活動ができるよう的確に指示を出す。 ●紹介時間は一人30秒程度であることを確かめる。	○「人の心を動かす言葉」とは何か。という学習を積み上げていることを意識するために、活動の目的を確認させる。	5分
			○上の句を考えた際に、女川一中生の詠んだ俳句に含まれる情景等のどんな部分に心を動かされ、どんな下の句をつけたいのか、自分の考えを発表する場を設定する。	5分
			めあて 女川一中生の俳句に込めた思いを感じ取り、その俳句にふさわしい下の句を完成させよう。	5分
展	2 班で下の句を完成させる。 ①構想シートを使いながら、班員それぞれから、「どの言葉」を、「どのように」使うか決める。	●交流の間に、発表者を決めておくことを指示する。	<b>【話し合う活動】</b> 女川一中生の俳句から、その心情や情景を考えながら、それぞれ解釈・理解し、ふさわしい下の句を話し合わせる。  <b>【書く活動】</b>	15

開	<p>②下の句が決定したら、ワークシートに、班員の考えたことや感想をまとめる。</p> <p>3 班の代表者が、発表する。</p>	<p>教師のモデルを参考にしながら、下の句を決めるときに、決め手となった上の句の言葉や、その背景を、構想シートに書き込ませる。</p> <p>○心を動かされている部分を適切に捉えられているかを、全体でも共有できるようにそれぞれの下の句を班で発表させる。</p> <p>○4の活動の時に、生徒の適切な考えを教師で把握しておく。</p>	<p>5分</p> <p>5分</p>
	<p>4発表の内容を見ながら、自分の感想を記入する。</p> <p>5いくつかの意見を交流する。</p>	<p><b>【評価場面】</b> (評価方法：様相観察・模造紙への記入状況)</p> <p>互いの意見を持ち寄り、班で交流し、上の句にふさわしい俳句を作り出そうとしているか。</p> <p>A) 互いの考えの良いところや、キーワードを参考にしたり、そこから派生した新たな意見を取り入れたりしながら交流し、まとめようとしている。</p> <p>B) 互いの考えや、キーワードを記入し、交流しまとめようとしている。</p> <p>C) 課題を理解できず、交流が進まず目的に近づかない。つまづきに応じて、説明、支援、助言が必要である。</p>	<p>5分</p>
まとめ	<p>6本時のまとめを行う。</p> <p>まとめ 言葉には人の心を動かす力があり、人々の心と心、人と人をつなぐ力を持ったものである。</p>		<p>5分</p>

## 8 研究のまとめ

### (1) 単元を貫く言語活動の設定のために

#### ① 言葉の持つ力を感じ取る素地を作るために。

「空を見上げて」の単元目標である「言葉の力」とは「言葉にはどのような力があるのかを読み取り、言葉について考えを深める」であるという目標を、深く読み取ることができるよう、前単元である「詩の世界」を横断的に使用し、単元目標に対する理解を深める手立てとして、詩の中にある「言葉」を、作者の心情を考えながら解釈していった。(【写真7】)



【写真7】

段階的に「言葉」の持つ力について解釈・理解を深めていけるように、教科書の詩を班活動で鑑賞し発表(【写真8】)、次に教師自作の詩(生徒が書くためのモデル)に自分で考えたタイトルをつけ、その詩からイメージされた感想画を画き言葉のイメージを深める活動を行った。(【写真9】) この活動のねらいとして、文学作品としての高名な作品の次に、身近な教員の自作の詩に、それぞれのタイトルをつけることで、次に行う、自分で作る作成活動に対し抵抗を少なくできると考えたためだ。



【写真8】

本校の学力実態から、何もない状態から詩等の作品を作らせるのは難しく、モデルを提示することでそれを参考にしやすいと考えたからである。

約7割の生徒が、自分の持つイメージに言葉を紡ぎ出し、それをつなげ詩を完成させたが、3割の生徒は教師の模範作品を真似た作品を作った。模倣という点は今後の課題となるが、わかりやすいモデルがあることで、ほぼ全員が自作の詩を完成させたことは大きい。また、「どういう心情でこの詩を作ったか」という質問項目では、文言で説明が難しい生徒は、感想画をより細かく描きそれを教師に口頭で解説するという場面も見られ、生徒が根拠を明確にできる可能性の場の設定は多岐に渡ることが効果的であるということがわかった。



【写真9】

それら他者の作った詩を解釈した練習の後、自分で詩を作成する活動を行い、言葉を考え自分の心情に沿って言葉を選択して使うことの素地を持たせた。それらで使用したワークシートは、一時間ごとに自作の「ことばノート」(【写真10】)にファイルしていき、自分の思考の変化や成果、または自作



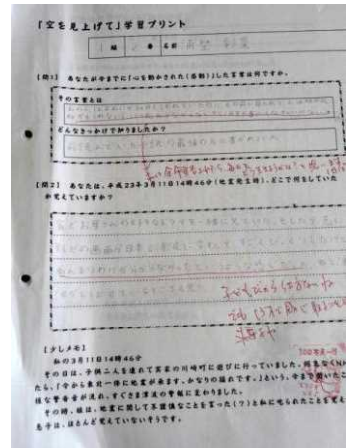
【写真10】



の書き直しの為、そして積み上げという達成感を持たせていくことにした。二つの単元のために使用するものであるという価値を持たせたことで、生徒はフィードバックや、推敲に用いる「言葉」の重要性の意義を深めることでも有効であった。

② 作者の心情の背景に迫る

本単元は、東日本大震災で被災した生徒達が作成した作品集「見上げれば がれきのしたに こいのぼり」が元となっている。女川一中生の俳句に、彼らの心情を理解し、より、作者の心情を酌み取り、そこに迫ることのできる作品が作れるよう、震災時の資料を提示し、その資料から生徒が受け取った感想を持つ手立てを取った。遠く離れた東北と、この福岡にあって、子ども達が決して「他人ごと」としてこの単元を解釈しないよう、この震災



【写真11】

災が起こったとき自分は何歳で、どこで何をしていたかを想起させ、それを比較することで、震災の深刻性を理解させた。(【写真11】)

これは、本時において、また本時へと積み上げる過程において、震災と真摯に向き合うことで、自分の内面にある誠実な「言葉」を生み出させたいと考えたからである。授業後の感想では、「当時、私と同じ位の子ども達が、いろいろなものを無くしても、前を向いて生きていたので凄いと思った」、「僕が東北に居たとして、震災で友人を失ったとしたら立ち直れないと思う」、「本当は泣きたいはずなのに、気持ちをぐっと抑えて前向きに生きているのが凄い」いうものが多く、女川一中生の気持ちに寄り添いながら、単元に前向きに取り組む手立てとして有効であった。

それを受け、教科書掲載の俳句以外の生徒の作品を、その作品集から精選し、教科書の俳句と合わせて、共感・驚き・疑問の三つの観点で俳句を鑑賞していき、俳句の中の言葉を徹底して吟味することで、自分の下の句作りの構想の足掛かりとした。(【写真12】) これはただよいものを選ぶという作業の中にも、無意識のうちに根拠があるということをあぶり出すための方途であり、「なぜ選んだのか」という理由を、個々が触発された言葉に一つ一つ感想を着け分析することで、自分の考えがより明確になり、他者への説明・理解もスムーズになるであろうと考えたからである。



【写真12】

分析作業をしていく上で、選んだ同じ言葉でも個々で解釈が違っていたり、違っているからこそ選んだ観点到違いが出てくることなどがわかり、次の個人で下の句をつける作業への大きな活動となった。

分析作業をしていく上で、選んだ同じ言葉でも個々で解釈が違っていたり、違っているからこそ選んだ観点到違いが出てくることなどがわかり、次の個人で下の句をつける作業への大きな活動となった。

(2) 選択した事柄の自己の観点を交流し、客観的に検討することで適切な観点を導き出す工夫

① 具体的な作成活動（自分で作る）

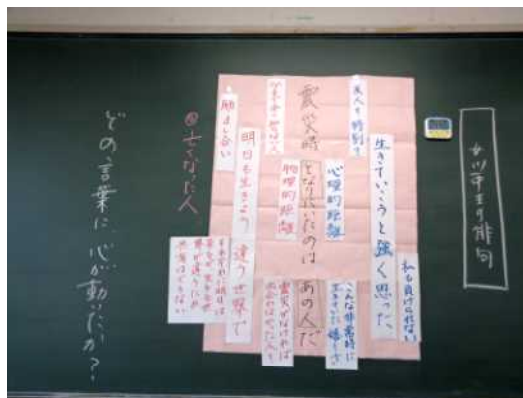
生徒自身が選択した俳句を分析する作業を通して、最終的に自分で下の句を考えたい俳句を一句選び、実際にその句に下の句を考える作業を開始した。

その際に、「ただ作る」ということではなく、「ただ作る」作業にも、何某かの根拠が頭の中にあるから「作る」ことができるので、今回は、自分が作り上げていく思考の過程を分析しながら作ってみようというところで、実際、教師自身が選んだ一句に教師自身が下の句を考え、つけながら、上の句の「どの言葉」から触発され下の句を考えたのか、また上の句の「どの言葉」が「どう」自分の作った下の句に影響を与えているのか、分析解釈していった。それらからできたのが【写真13】の「構想シート」である。

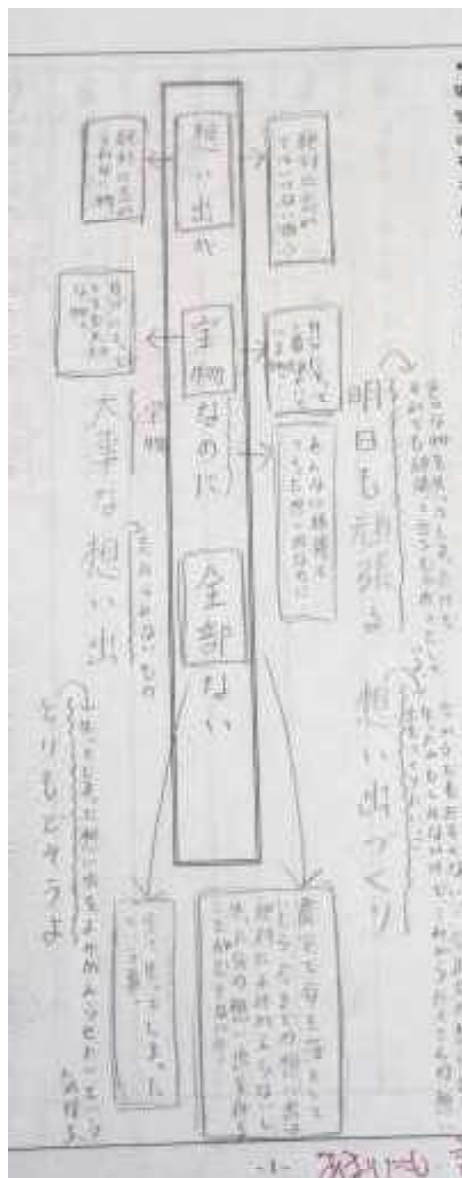
また、構想シート（教師が作ったモデル）を用いた下の句作りで、言葉を解釈・分析して作るということだけではなく、一つの句でも、言葉に深く注目することで何通りもの下の句が完成できる可能性があることを示唆し、同一の俳句からあえて二つの下の句を作り、上の句にある同一の言葉でも、解釈次第では幾通りもの俳句の完成が存在できるということを理解させた。これは本時で、生徒達が、より具体的に俳句を読み、よりふさわしい下の句を作ることができるようにする為である。

② それぞれの句を読み、班で練り直す

①の取り組みで、自分の下の句を完成させ、それぞれが紹介し自評を述べる機会を設定した。そして本時での、生徒個々が練り上げてきた言葉の解釈や分析を持ち寄り、精査・推敲し、女川一中生の俳句にふさわしい下の句を完成させる作業に移った。その際、個人で下の句を完成させる



【写真13】



【写真14】

時に使用した構想シートを基に、他者の構想シートや教師の模範を逐次参考にしながら一つの下句を完成させた。【写真14】

本單元における俳句の作成指導で、一貫して構想シートを用いて練習をさせたことは、本時の活動において有効であったと考える。班で新しい一句を練り上げる際に、他の班員が、どんな言葉を用いていたのか、その言葉と根拠がわかりやすく生徒の手元に常にあったからである。生徒達はことばノートを振り返りながら活動を進めることができたと感じている。

最後に本単元のまとめとし、全員の作品に使われた「言葉」に焦点をあて、一人一人が違う作品でありながら、各々が用いた「言葉」の根底に流れているものは何かとすることを考えさせた。この取り組みから、生徒が個々で考え出した言葉が、結局はそれぞれが遠く離れた東北の中学生の心情に寄り添えるものだという結論に至り、言葉の力とは、「人を応援するもの」、「人を癒すもの」、「人の心を変えられる強い力」、「相手の心を思いやれるもの」という生徒自身が導き出した考えが、本単元の単元目標である「言葉の力」とは「言葉は人の内面を作り出す力を持つ一方で、人と人とをつなぐ力を持つ」ことに迫ることができ、ある程度まで目標を達成できたと考えている。

## 9 成果と今後の課題

### (1) 成果

- 構想シートは効果的であった。
- 本時に至るまで、継続的に構想シートを活用した取り組みを行っていたため、「調べてみたい」、「解決したい」という気持ちには差があるが、全生徒が、「本時、何を元にして、どういう方向で取り組んだらよいか」を理解して臨むことができた。

### (2) 課題

- 「めあて」までの時間がかかりすぎたため、活動の時間がじっくり確保できなかった。ここが確保できれば、生徒達のさらに深く考える活動ができたのではないか。
- 「読み」を深める手立てが適切であったか。

### ◇ 主な参考文献

- ・ 中学校学習指導要領解説 国語編（平成29年） 文部科学省
- ・ 中学校教育課程実践講座 国語 高木展郎著 ぎょうせい
- ・ 「みあげれば がれきの上にこいのぼり」地球人交換日記〈1〉 山中 勉 日本宇宙フォーラム